

# 東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言の音韻対応から推定された紀元前約1万年前の「呼気量変化」（口腔鼻腔流出量比率変化）とその要因について

あべ せいや

## 論文要旨

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）における南北音韻対応（安部清哉 2007.10）の現象から推定して、南北間での発声方法において、過去に何らかの理由で生じた北方方言における「呼気量変化（呼気の口腔鼻腔流出量比率変化）」のために、南北間で大きな相違が発生した蓋然性が高い。その「呼気量の格差」が今日に残る「音韻対応」の発生理由の第1の要因と推定された。その「呼気量変化」の発現の言語学的な蓋然性の確からしさを、より強固にする（補強する）ためには、文字言語資料あるいは物理的資料などが、直接的あるいは間接的な裏付け証拠として提示できる必要がある。本稿は、その物理的・身体的（=physical）な証拠として、「寒冷適応」による北方モンゴロイドの頭部顔面（頬骨）の骨格変化を物証として提示し、その解説を行うものである。また、この骨格変化それ自体を、単独証拠として検討しても、北方方言での「呼気量の変化」が推定可能となる。なお、この「音声変化」の生じた時期については、東アジア・北方モンゴロイドにおける寒冷適応が進行した時期が、最寒冷期であった紀元2万年前～1万年前と推定されていることから推して、上記東アジア地域（安部（2008.4）における「モンsoon・アジア言語文化境界線」の南北の地域）における南北音韻対応の発現時期は、おおよそ、紀元前1万年前後以降と現時点では推定される。この「呼気量変化」、より正確には「口腔鼻腔流出量比率変化」によって、日本語・中国語・朝鮮語それぞれにおける南北方言間での音韻的相違である「音韻対応」（の一部）が形成された、と結論づけられる。

**キーワード**【東アジア言語の南北方言、寒冷適応、呼気量の口腔鼻腔流出量比率変化、東アジア言語の音韻対応の要因、モンゴロイド】

## 1 はじめに

本稿では、東アジア言語に見られる南北間での「音韻対応」（発音の対立的相違）の成立要因について、物理的肉体的観点から1つの仮説を提示する。東アジアにおいて、北方方言における口腔からの「呼気量」（付記1）の増加を生み出し得る要因を、過去1万年以上前を視野に入れて検討した結果、北方モンゴロイドが蒙った「寒冷適応」が、「音韻対応」を発現させた要因であると解釈された。また、その「寒冷適応」における「顔面の扁平化」に認められている「鼻腔の容積増大」という骨の変形が、上記の音韻的変化の要因の物理的証拠に成り得る、と結論付けられた。なお、その時期は、東アジアにおける最寒冷期の時期が

およそ紀元前約2万年～1万年前であること（最寒冷期の終焉時期が紀元前約1万年程前＝日本では縄文時代の始まる直前であること）から推して、北方での発音の変化時期（口腔での呼気量の増加時期）は紀元前1万年前後と推定され、「音韻対応」の形成された時期もおよそその時期以降と推定される。以下、簡略に、本説の概要を述べる。

なお、「寒冷適応」に関しては、◆注1を参照されたい。なお、医学的には、鼻腔とその周辺部分にある副鼻腔とは区別されるが、問題とする寒冷適応の影響においては、鼻腔と副鼻腔（中でも上顎洞）との拡大が共に関連していると解釈されているので（◆注1の2の植原説）、本稿では「鼻腔」でそれらを代表させる。

## 2 論証の概要

題名のように、言語現象の推定を、過去1万年前以上に遡って推定するという、一見奇を衒ったような行論であるので、その論証の手順を略記してから論じていくことにしたい。

1) 東アジア言語（日本語・中国語・韓国語）においては、一定の地理的位置における広義の文化的相違とその同じ位置での南北間の、ある種の所謂「音韻対応」と言えるような現象が指摘できる（安部清哉 2007.10, 2008.4）。この問題の次なる課題としては、1つは、それが「音韻対応」と確かに言えるものであるかという検証作業（別に発表予定）、および、次に、それが生じた要因・時期・その具体的証左の考究である。（本稿では後者の問題を取り上げる）。

2) その「音韻対応」からは、この南北方言において、過去の相当古い段階（数千年前から数万年前という単位）において、同一音声状況から南北での音声的相違（音声的分岐）が生じたことが推定された。その変化の方向としては、1つの可能性としては、①北方での「口腔の呼気量の増加」か「喉音化」「円唇化」「口蓋化」等の音声変化か、または、いま1つの可能性としては、②南方での「鼻音化」（さらにそれに「唇音化（円唇化、閉唇化などを含む）」を伴うか）、あるいは、これらの両方が同時に生じたか、などの可能性が強く推定された。

3) 1)の現象を解釈した際の言語資料は、現代およびごく近年の言語資料や方言によるものであるから、2)に触れたように相当に古い過去に生じた現象として推定するとなれば、その根拠となる言語的資料、ないし、物理的（物質的・具体的・身体的＝physical）な証拠の提示が必要でもあろう。

4) そこで、2)のような変化を生み出し得るような現象を、東アジアの文化的現象に広く探索した結果、北方モンゴロイドが過去数千年以上前において蒙った「寒冷適応」現象が、その1つの証左になり得ると解釈された。「寒冷適応」が証左になるという解釈の概要は、以下の通りである。

5) 「寒冷適応」においては、「鼻腔内空洞の容積増大の必要が生じた結果、頬骨が前面に張り出し、その結果、いわゆる典型的なモンゴロイドらしい、鼻梁から頬骨に掛けての顔面部分が扁平な（鼻梁が結果として低く見えるような）のつぺりとした容貌が形成された」と言われている（所謂「顔面の扁平化」「頬骨部の前面への張り出し」等と言われる形質変化が生じた）。

6) その「鼻腔内の空洞の拡大」が必要になった理由としては、外界の冷気の取り込み時における頭骨内（頭部）への冷気流入による頭部や脳への刺激（冷たさ）を極力回避するため、特にその刺激（痛み）が口腔よりも大きい鼻腔内への、吸い込み（吸気）による冷気を和らげるための1つの選択肢として、鼻腔内の空洞を極力広くして、鼻腔内の空気と粘膜による緩衝（クッション）を増大させるという方向での形質変化が、身体的対応として発現することとなった、と解釈されている（注1参照）。

7) ところで、鼻腔内での刺激を軽減するのであれば、まずは「鼻腔内への吸気を軽減させる」方が効率が良い。鼻腔内への刺激を減らす上で、上記のように、意識的意図的には不可能な変化であるところの、「骨を变形させる」という肉体変化よりも先に、意図的意識的に可能な、鼻腔への吸入を減少させる方法を取ることの方が容易であることは明白である。

8) 一方、発話上も呼吸上も、吸入だけを減少させて吐く息（呼気）は変化させないということは容易ではない。つまり、鼻腔への刺激回避にあたり、鼻腔を経由する吸気を減少させるということは、同時に、「鼻腔を経由させる呼気および吸気の両方にわたる鼻腔の呼吸量全体を、それ以前よりも減少させる」ことを意味する。それはまた同時に、その一方で、肺呼吸量全体を維持するための代償として、口腔を経由させる呼吸量の方を増加させるというかたちで補填し、呼吸量全体のバランスを維持したものと解釈される。

9) つまり「寒冷適応」において、上記のような「顔面の扁平化」が進行していることから推定して、それと併行して同時に、「鼻腔を経由させる呼吸量が減少し、その代替として、口腔を経由させた呼吸量が増大するという形で、鼻腔口腔の呼気吸気量の比率が変化し、結果として、口腔からの呼気量がそれ以前よりも増大する」という現象が、北方モンゴロイドにおいて「のみ」、南方モンゴロイドとは別に生じた、と推定されることになる。

10) 鼻腔を経由する呼気量が減少し、代わって、口腔を経由する呼気量が増大すると、発声現象にはどのような影響が生じるであろうか。発声現象においては、その変化の前後において、鼻音的要素が減少し、一方で呼気が強く現れるような音声現象が増大することが推定可能となる（その他の現象も推定可能である）。このことは、上記の「音韻対応」から推定した南北方言での音声的相違の現象と一致する。

11) 以上より、北方モンゴロイドにおいて生じた「寒冷適応」が、東アジアの南北方言での音韻対応現象を生み出し得た1つの重要な要因として、推定可能となり得ると結論付けられる。その形成時期は、最寒冷期が終焉する紀元前約1万年前後には、発現していたものと推定されることになる。

12) なお、北方モンゴロイドの分布位置は、考古学的、文化人類学的研究からも推定されているが、南方モンゴロイドとの気候的相違が大きかった地域として位置づけることが可能なものである。北方方言と南方方言との境界位置も、気候の大幅な相違がある東アジア中央部であり（安部清哉（2008.4）における「モンスーン・アジア言語文化境界線」）、これらは、その分布境界線の位置においても一致しているから、このことも上記の推定を、地理学的に裏付けている。

以下、上記について順に解説することにした。

### 3 南北の方言境界線と南北での発音の相違

東アジアの言語である日本語、中国語、朝鮮語には、それぞれにおいて、南北での方言的相違が認められる（Chart 1 参照、なお、以下の Chart 1・2・3 は安部（2009.3）段階のものから転載するが、それ以前の安部清哉（2007.10）・（2008.4）にも一部示してあり、また、前後する一連の関連拙論も参照されたい）。

本稿執筆者は、それらに関する研究の過程で、それが、東アジアにおける、ある種のいわゆる「音韻対応」現象と位置づけられるものとして提示してきた。（それが「音韻対応」と呼べることについては、インドーヨーロッパ語（以下、IE と略記する）における「音韻対応」との対比を示して、補強する予定である。）

その対応の事例の1つは、Chart 1 の「Bilabial」に記した「b・p—m」の対応である。具体的な語形での事例としては、微細な兆象であるが安部清哉（2005.5）で取り上げた表1のような例が指摘できるものである。

いま1つは、Chart 1 の「Lelar/ Labial (labial Velar)」の欄に記したものであり、これはまた、Chart 2 に示したように、安部（2008.4）でより詳しく提示したものである（安部（2007.10）・（2009.3）などが関連する）。（なお、Chart 1 の「Alveolar」の「d・t—n」は、例えば中国語の「泥」における「デーネイ」のような南北相違等を視野に入れたものであるが、より詳しくは「d・t・r—n・j」のような複雑な対応をもつと考えているので（例、日本語の断定の助動詞のダーヤの d—j の対応、読（中国語）—ヨム（日本語）の d—j 対応など）、ここでは詳細は割愛する。また、これら Chart 1 の3対が同じ要因を背景にもつものか否かは未詳である。）

**Chart 1 Sound Correspondence ‘b/p—m, d/t—n, k/x—p (<\*kw)’  
between North and South Dialects in East Asian Languages;  
Japanese, Chinese and Korean Languages.**

EastAsian Lang.	Bilabial	Alveolar	Lelar/Labial (Labial Velar)	Distinctive feature
North Dialect	b/p	d/t	*k/g, x, h/fi	gutturales
South Dialect	m	n	p/b, (ku, kw/gu, gw), f Φ	nasal or livial?

【概略、北方が喉音 (gutturales) 的傾向、南方が<sup>3</sup> nasal か livial 的傾向で対立する。】

**Chart 2 東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）における  
「\*g・k・x・h—\*gw・kw・p・f・Φ」の音韻対応**

	北方方言 (North) *g・k・x・h	南方方言 (South) *gw・kw・p・f・Φ	意味 (meaning)
日本語 JPN	su <b>kk</b> a-i k <b>it</b> su	su <b>pp</b> a-i p <b>it</b> su p <b>ap</b> i (kw←灰)	酸っぱい (sour) 櫃 (bucket made by wood) 灰 (ash)
朝鮮語 KRN	<b>x</b> ul (hor)	<b>p</b> uri (p <b>ir</b> i) / <b>p</b> ul (p <b>ir</b> )	村落 (village)
中国語 CHN	<b>x</b> wəŋ, <b>x</b> ur, <b>h</b> uo	<b>f</b> o, <b>f</b> ei, <b>p</b> ui (v-, b-, m-)	火 (fire)
日本漢字音	fī→ (漢音 <b>k</b> (kw-)) 絵 [fiuai] → <b>k</b> wai 恵 [fiuei] → <b>k</b> wei 和 [fiua] → <b>k</b> ur	(呉音 <b>w</b> ) 絵 <b>w</b> e 恵 <b>w</b> e 和 <b>w</b> a	絵 恵 和

**Chart 3 MA 文化圏内の言語の「火」を表す語彙【\*pui】 2007.10**

日本語 Japanese	[hi<pi, po<*poi]
中国語 Chinese	[huo (xuə・xua) <xua<*xwəŋ 上古音<*pur<*puə]
アイヌ語 Ainu	[apé<*apui<*pui<*pui]
朝鮮語 Korean	[pul<pil]
南島語 Austronesian	[*apuy<*aqui<*pui]
(cf. Proto Altaic)	[*p'ore] (fire, burn) by Greenberg 2002

**【表1 〈沼・泥〉に見られる [b・p—m] の東アジア南北音韻対応の法則】 (※は推定位置)**

音韻対応	半島部	列島部	大陸部 [中国語否定詞] (橋本萬太郎 1978)	
b, p 北方音	朝鮮語 ※ nup (*北部朝鮮語)	アイヌ語 nup (日本語 nuba)	不 *piuə (g) 弗 *piuət 非 piuə (d)	破裂音
m 南方音	新羅語 numa	日本語 numa	無 *miuəg 勿 *miuət 微 miuə (d)	鼻音

「MA 中央気候線」(安部 1999.9) の南北における東アジアの音韻対応の法則 [p・b—m 対応]



図1 北方(新)モンゴロイドと南方(古)モンゴロイド

「モンゴロイドの2タイプ」

男女各々、右側——古モンゴロイド(縄文人型)、左側——新モンゴロイド(渡来人型)

佐々木高明(1991)『日本史誕生(集英社版 日本の歴史①)』集英社 p.267より。(画・山本耀也)

IE(印欧語)の「音韻対応」のように、そこでは、広域分布事例としての同一語源語形による対応を示せる段階にはまだないが(但し、「Lelar/ Labial (labial Velar)」の事例としての、Chart3の「火」の例はそれに近いものであるが)、現段階としては、同一語形でなくとも、このような「音韻上の対応現象」でも、「音韻対応」として、一定の言語学的意味があると考えている(詳細は、IEの事例と共に機会を改める)。

また、このChart2が明らかになった結果、Chart3に示したように(安部2008.4)、「火」の語形においては、アジア・環太平洋の語形が同一語源であることが論証され、中国語の「火」の語源も、他のアジア・太平洋言語と同源であることを初めて明示することができた。

ここでは、それらの拙論を検証するのが目的でないので、詳細は省略するが、それら日本語・中国語・朝鮮語それぞれにおいて、音韻的相違をもつ南北方言の境界線の地理的位置は、ほとんど横並びになった連続するものであり、東西に連続する一続きの方言境界線として解釈できるものであった(図2、図3の境界線の位置参照)。

また、その言語的境界線の成立要因にも、上記3言語において、一定の共通した特徴——気候の南北地域での相違、および、その南北間での急激な寒暖差という気候の相違を背景にした風土、動植物、食べ物を含む生活様式全般にわたる総合的文化的特徴の南北間の格差(安部2006.3)——があると解釈された(図2の下部に解説してある様々な境界線を参照されたい)。つまり、そのような気候的相違、文化的相違が、言語方言的相違を形成する間接的一要因になっていると解釈された。

また、そのような広義の気候的文化的相違は、紀元前1万年以上前の旧石器時代にまで遡り得ることが、考古学上における地理学的同位置での境界線からも、推定可能であった(図3参照)。

さて、そこで、Chart1・2の現象を、ひとまず仮に「音韻対応」とした場合に、次なる問

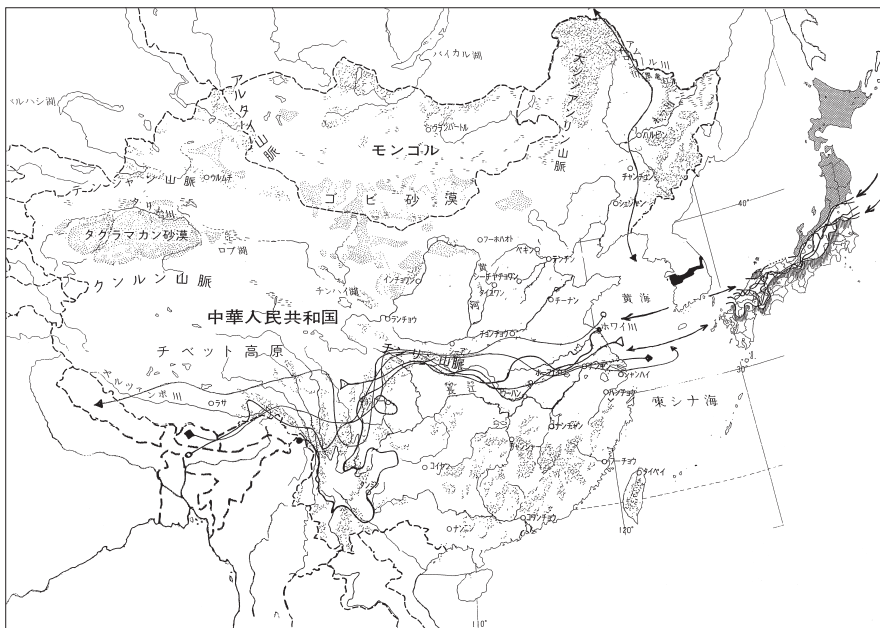


図2 モンスーン・アジア言語文化境界線（安部 2007.3d）

中国「北—南」境界：▲河—江 △溝—溪（共に河川名〔北—南〕の方言境界）◆動物区画線（古北界—東洋界）○摂氏0度等温線（最寒月1月）●1000 mm/年間の等降水量線（いわゆる「泰嶺山脈—淮河—境界線」に相当）【日本・朝鮮半島は、南北方言境界線】

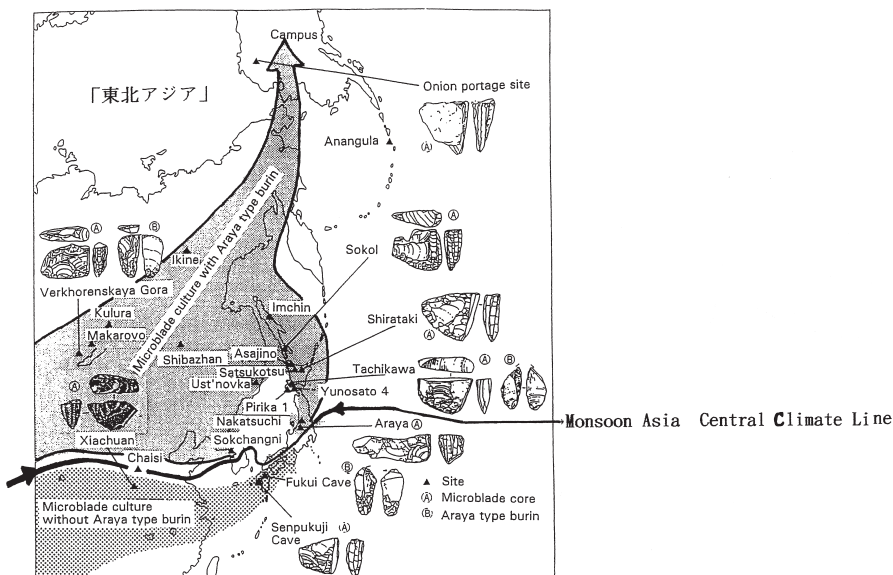


Figure 3. 16 Diffusion of wedge-shape microblade core from the mainland into the Japanese islands (Yoshizaki 1986).

図3 「Monsoon Asia Central Climate Line M. A. 中央気候線」（中国国内は「泰嶺—淮河線 Qing-Line =Huai-river=Line<sub>2</sub>」）（安部 2006.3）

題として検討する必要があるのは以下の点である。

音韻対応が生じた要因

音韻対応が生じた時期

音韻対応のより具体的証左

本稿は、これらのうち前2者について考察してみようとするものである。

#### 4 「音韻対応」の南北差の特徴

##### ——「呼気」「喉音」「鼻音」「唇音」「口蓋音」——

さて、上記「音韻対応」からは、この南北方言において、過去の相当古い段階（数千年から万年の単位）において、同一音声状況であったところから、南北での相違（分岐）が生じたことが推定された。

具体的に一例として、Chart 2（「k—p 対応」）の現象を取り上げれば、そこでの南北の音声に共通する祖語形としては、言語学的には〔\*kw〕が想定されることになる現象である。それが、北方では〔k, g〕などの音形のように、その唇音性を喪失して、喉頭性を強めた破裂のみとなり（南方のように唇音性を強化せず）、一方、南方では〔p, b〕ほかのように、その喉音性を弱体化させて唇音性を強化させる、という方向で変化し、それぞれに特徴的方向性が認められるのである。（ただし、「b—m」対応や「t—n」の対応のように、〔kw〕以外の他の対応では、北方での「破裂性の強化」、南方での「鼻音性の強化」と見られる傾向もある。）

それらの傾向に共通する特徴を、Chart 1 の対応3対から統一的に抽象化させて確定させるのは、要因が未確定の現段階では容易ではない（全体としての傾向は今後の課題である）。しかしながら、現時点における解釈上のキーワードとしては、

「呼気の強化」「鼻音性」「唇音性」「喉音性」「円唇性」「口蓋化」

などの特徴を検討する必要があることがわかる。（さらにまた、これらの1つということではなく、それぞれが複雑に関連している複合的現象であることを視野に入れておく必要がある、と思われる）。

今後、さらに検討が必要な部分があるが、現代階においては、その3対のうちの「Lelar/Labial (Labial Velar)」として挙げた「k—p 対応」が最も確実性の高い対応として重視される。そして、この「k—p 対応」（実際には Chart 2 に示した対応例）における変化の方向性の解釈としては、次のような可能性が推定された。

- ① 1つの可能性としては、北方での「口腔の呼気量の増加」か「喉音化」か。
- ② いま1つの可能性としては、南方での「鼻音化」（「唇音化（円唇化、閉唇化など）」を伴うか）。
- ③ さらにもう一つの可能性としては、①②の両方が同時に生じたか。



もっとも重視されるのが「呼気」と「鼻音性」「唇音性」であろうと解釈された。

この「音韻対応」の傾向を認めるにあたって参照した言語資料は、現代語（方言を含む）、および、文献資料を含めてもごく近年のものであるから、考古学の打製石器の分布（図3）が示しているような、相当に古い過去に生じた現象として推定するとなれば、その根拠となる言語的資料、ないし、物理的（物質的・具体的・身体的＝physical）な証左の提示が必要になろう。そのような裏付けが求められると思われた。

次章以降では、それらについて、述べてみることにしたい。

## 5 発音に影響し得た過去の東アジアの人類への「寒冷適応」の影響

発音に上記のような変化を生み出し得るような現象について、特に、「呼気」「鼻音」「発声器官」などへの影響を残したであろう現象に焦点を当てて、東アジアの文化的現象全般を探索した結果、北方モンゴロイドが過去1万年以上前において蒙った「寒冷適応」現象が、その1つの証左になると推定された。「寒冷適応」が証左になるという解釈の概要は、以下の通りである。

「寒冷適応」は、北方モンゴロイドが、北部アジアの氷河期に起こった「最寒冷期」を生き延びる上で蒙った「身体形質の変化」全般を指す術語である（注1参照）。「寒冷適応」においては、様々な身体形質の変化が指摘されているが、その中でも関係するのが「顔面の扁平化」である。

「寒冷適応」を受けた頭部では、「鼻腔内空洞内に、より広い空間の確保が求められた結果、頬骨が前面に張り出し、その結果、いわゆる典型的なモンゴロイドらしい顔付き、つまり、鼻梁から頬骨に掛けての顔面部分がのっぺりとした扁平な（鼻梁の低い）容貌が形成された」と言われている（所謂「顔面の扁平化」「頬骨部の前面への張り出し」などと表現されている）。

その「鼻腔内の空洞の拡大」が必要となった理由は、外界の寒気の取り込み時（吸気時）における頭骨内（頭部）への冷気流入による刺激を極力回避するためとされる。特に、その外界冷気の影響が、口腔よりもより強くなる鼻腔からの冷気を少しでも和らげるための1つの選択肢として、鼻腔内の空洞を極力広くして体内内部の空気による緩衝（クッション）を増大させる方向が取られた、と解釈されている。

ところで、鼻腔への吸気を減らす上においては、意識できない変化である「骨を変形させる」という身体変化よりも先に、意図的にでも、鼻腔への吸入を減少させる方法を取る方が容易である。ここに、「鼻腔を経由する呼気量を減少させる」という行為が、鼻腔内への刺激の低減のために、無意識にせよ、選択されたであろうことが推定可能となる。

しかし、発話上も呼吸上も、吸入だけを減少させて呼気は変化させないということは容易

ではない。「吸気」だけを減少させ、鼻腔を使用する「呼気」は以前のままという収支のアンバランスな変化(吸気量=呼気量のアンバランスな変化)は、現実的には起こりにくいと考えられるからである。それゆえ、鼻腔への刺激回避は、鼻腔を経由させた呼気吸気両方における呼吸量全体を、それ以前よりも減少させる、というかたちで発現した、と考えられる。

さらに、気温が寒冷化して鼻腔での呼吸量が減少したからと言って、呼吸や発話における、肺による呼吸量全体が減少してしまうとは考えにくいから、それが一定であったとすれば、肺呼吸量全体をそれ以前と同量に維持するために、鼻腔での呼吸量の減少を、口腔を経由させる呼吸量の方を増加させるというかたちで補填し、バランスを保ったであろうと考えられる。つまり、「鼻腔を経由する呼気吸気双方の減少」という事態は、その減少量を補完するために、一方で「口腔を経由する呼吸量の増大」を同時に生み出す結果をもたらした、ということになる。

これらを発声・発音という観点から見なおせば、ここに、一方では

(1) 「鼻腔の呼気の減少」

とそれと同時に一方で

(2) 「口腔の呼気の増加」

とが、同時に生じたということになる。つまり、この「寒冷適応」による鼻腔吸気量を減少させるという要求は、結果として、

(3) 「鼻腔口腔の呼気量比率の変化」

を導き出した、ということになる。そしてそれは、ひいては、例えば、「鼻音」等の鼻腔を経由する音の弱化、あるいはまた一方で、「(鼻腔音を弱化させての) 口腔を使った呼気の強い音の強化」などの現象を導き出し得ることが、ここに容易に推定されることになる。

つまり、「寒冷適応」によって「顔面の扁平化」が進行していることから推定して、それと併行して同時に、「鼻腔を経由させた呼吸量が減少し、その代替として、口腔を経由させた呼吸量が増大するという形で、鼻腔と口腔の呼気量(吸気量も)の比率が変化する」という現象が、「北方モンゴロイドにおいてのみ」生じたことになる。

では、そのような呼気量の変化は、実際の発声現象に具体的にはどのような影響を及ぼし得たであろうか。鼻腔を経由する呼気量が減少し、代わって、口腔を経由する呼気量が増大すれば、発話現象においても、その変化の前後において、鼻音的要素が減少し、一方で呼気が強く現れるような音声現象が増大することが推定可能となる。例えば、もともと典型的にその影響を受けやすい音声为例示すれば、鼻音と破裂とを2重に持つような音 [mb] [nd] などの発音は、鼻音を失ってより破裂の強い [p,b] [t,d] などへと変化したことが推定されることになる。あるいはまた、唇音と喉音との2重調音 [kw] [gw] なども、強い呼気放出の動きの中で唇による微妙な調音を弱化させ、破裂の呼気を単純に放出しやすい破裂音 [k,g] や、気音を伴う [kh,gh] などへ変化させたであろうことが、容易に推定される。

これらの推定される音声変化は、上述の「音韻対応」（Chart 1, Chart 2）から推定した南北での音声変化（分化）の現象と一致ないし関連しているものであることがわかる。

以上より、北方モンゴロイドにおいて生じた「寒冷適応」という現象は、東アジアの南北方言での音韻対応現象を生み出し得た1つの要因である蓋然性が高い、と結論付けられよう。なお、その形成時期は、最寒冷期が終焉するのが紀元前約1万年前後とされているので、それをピークとしたその前後の時期と推定される。（より精密には、その形質の獲得を、考古学上の頭骨による研究によって明確にできるであろう。）

補足すれば、北方モンゴロイドの分布位置は、南方モンゴロイドとの気候的相違から推定されてくるが、北方方言と南方方言との境界位置も、気候の大幅な相違がある東アジア中央部であり（図2における「モンsoon・アジア言語文化境界線」の河川名の境界がその痕跡である）、その分布境界線の位置においても一致しているから、上記の推定を、地理学的にも裏付けている。

## 6 要因と可能性と発現形式との関係

### ——呼気量比率の変化は発声のどのような範囲に影響し得るか——

上述した「音韻対応」が生じ得る証左を、「寒冷適応」における形質変化という具体的物理的な現象によって提示できたことによって、提示した「音韻対応」の解釈の妥当性が、より補強された、と考える。

本稿としては、上記までのところでひとまず一区切りとするが、音声学的な考察としては、なお検討すべき点が残されている。それは、「呼気量の口腔鼻腔流出量比率変化」は、常に同じ「音韻変化」を発現させるものかどうか、という問題である。あるいは、常に「鼻音の弱化」または「喉音化」に限られるか、という問題である。より一般化させた言い方をすれば、「呼気量の口腔鼻腔流出量比率変化」が生じた場合に、どのような発声への影響があり得るか、という問題である。6・7の章でそれらのことを補足的に検討しておきたい。

このことを、音声学的に考察した研究は、管見の限り見出せていない。実験音響学などにおける分析も必要である。（執筆者は、呼気量の地域差、あるいは、呼気の口腔鼻腔流出量比率の地域差の実験音響学的調査を、日本語方言における東西方言を対象に試験的に行っている。安部清哉（2006.3b）・（2007.3d）参照。）

また、それらの考察や調査とあわせて、東アジアの南北方言間に見られる発声上の相違を、さらに詳細に比較していく必要がある。すでに本稿での主題から離れるので簡略に記すが、例えば、本稿でも触れた観点も含めて、特に関連するであろう以下の観点からの考察が重要と思われる。

- ① 喉頭音化、非喉頭音化、口蓋化、非口蓋化、有気音化、無気音化、有声化、無声化、円唇化、非円唇化、鼻音化、非鼻音化、などの音声変化現象。

- ② 種々の音声的対立的弁別特性の有標化ないし有標性——有気音無気音の弁別性の有無、有声無声の弁別性の有無、円唇音非円唇音の弁別性の有無、口蓋音非口蓋音の弁別性の有無、喉頭音非喉頭音の弁別性の有無、鼻音性非鼻音性の弁別性の有無、など。

なぜこれらが重要な観点になり得るかについて、2点のみ触れておくことにする。

1点は、①における中国語に関するものであるが、その中古音（長安音など）において、有声無声の区別を失っていく現象がある。これは、長安音が北方方言を基盤にしたものであるために（◆注2）、上記のような北方モンゴロイドに生じた音声的特徴の影響であることが考えられることになる（長安（西安）は、図2の境界線より北側に位置する）。北方方言のある種の特徴——「呼気」に関わったであろうと推定される「有声無声の弁別性の有無」を喪失した北方的音声特徴が、長安音に投影し、ひいては中国語音韻史に影響していったことが推定される。もしそうであるなら、本稿が取り上げた「口腔鼻腔呼気量比率の変化」「寒冷適応」は、中国北方音、ひいては中国音韻史を解釈する上でも、重要な意義を持つてくることになるからである。

いま1つの関連性のある課題は、②におけるもので、言語音声における「前方円唇母音FRVが有標である言語の世界的分布」に関するものである（安部2006.3）。データの多く得られている北半球の言語に関して言えば、その母音体系において、Front Rounded Vowel = FRVが非円唇母音と弁別的に対立して機能している言語はその北方に偏在していることが指摘されている（これについては既に安部（2006.3）にJohn Crothers（1975）の地図と文献を提示して問題提起してある）。この「円唇母音の有標性」と呼気の強さとの直接的関係については、いま断定できる材料を直ちに持ち合わせていないが、口腔での呼気の強化あるいは（及び=and/or）寒冷中の発話の口構え（後述7.3.2参照）の音声への影響ということと、寒冷気候である北方地域ということとの関連性は、今後検討の余地があると考えている。（さらに付け加えれば、緯度の高い地域の言語の母音数が多く、反対に緯度の低い地域の言語の母音は少ないことが従来から知られているが（例えば、WALSにおける母音分布ほか参照）、そのような母音の数との関係も検討すべき課題と考える。）

さて、議論を、呼気量変化の影響が及んだ可能性がある音声的特徴の問題に戻せば、上に触れた諸特徴も、どれか1つだけが発現しているとは限らず、複数の特徴が複合して現れ得ることを考慮すべきであろう。また、その複合的発現においても、常に特定の諸特徴の集合としての1セットとして1パタンのみ（1つの共通現象のみ）が発現するとは限らず、生じ得るいくつかの特徴のうちのいくつかの特徴が、その個々の言語特徴、地域、何らかの言語外的要因、さらに偶然の結果によって、適宜選択されて発現してきた、ということも、十分考えられる（むしろ、この最後のような可能性の方が高いかもしれない）。

**モデル例示**（発現形における具体例——諸特徴を○数字で示す。諸特徴としては、例えば、喉音性、円唇性、口蓋性、帯気性、緊張性、摩擦性などが考え得る。）

言語 A 《 ①+②                    +⑤ 》

言語 B 《                    ②+③+④+⑤ 》

言語 C 《 ①                                    +⑤ 》

言語 D 《                                    ④                    》 etc.

これらの問題をも視野に入れて、考察していく必要がある課題であろうと考えている。

## 7 補論——音声の変化および地域差の特徴と要因の考え方の課題——

### 7.1 音韻対応の「必要条件」が寒冷適応ではないこと

本論では、安部（2007.10）にて提示した「音韻対応」が、極めて古い年代に遡り得るものであったため、文献資料ではその実証が難しい年代と考え、その音韻対応の1つの具体的証左になり得るものとして、「寒冷適応」による顔面扁平化という骨の変形を提示した。

ここで改めて強調しておきたいのは、本論の意図は、この寒冷適応の現象を「証拠として」、提示した音韻対応の発現を「証明」しようとしたもの、ではない、ということである。本稿執筆者自身は、安部（2007.10）で論じたように、そこで提示した資料と論拠によって、そのいくつかの「音韻対応」が論証されている、と考えている。本論の意図は、1つには、その「音韻対応」が生じ得た「要因」に関しては、未提示であった前論に対して、最も蓋然性の高い解釈を提示することにあつた。いま1つには、おそらくはアジアの広域の複数言語に対して、数千年から万年という単位での過去に遡った、極めて前例の少ない言語現象への、新説の提示であるので、過去における物理的証左になり得る現象を提示することで、より具体的に拙論の提示した問題提起の現実性を、考慮してもらおうとしたものであつた。

「寒冷適応」での顔面扁平化が唯一絶対的な証拠にはならない、ということは、実は、本論の中でも間接的に触れてきている。それは、本文内でも述べてきたように、呼気の変化を起こすような行為は、「骨を変形させるという、意識的には出来ない、（長期の時間がかかる）身体を変形させる行為」よりも先に、無意識的にせよ「鼻腔への呼気の流出を減らして口腔への流出を増やす行為」という、短時間に可能な、意識的にも出来る、より容易な動作によって実現可能であるからである。つまり、骨の変形が生じるよりも前に、あるいは、変形が生じる程の極度の寒冷段階や長期間には至らなくとも、呼気量を変化させる現象は、発現し得た、ということになる。（この点は、地域的問題、特に、日本列島における北方方言での音韻現象の要因を解釈する上で（また、世界的規模での南北地域の音声的相違を検討する上でも）、極めて重要であるので、次節の7.2でも再度触れることにしたい。）

なお、敢えて、音韻対応との関係において、「寒冷適応」が一定の具体的「証拠」となり

得る点を挙げるとすれば、その「発現年代」の推定に関して、であろう。それは、もし、寒冷適応が唯一の要因（◆注3）であったと「仮にするならば」という条件が付くものであるが、当該の音韻対応が生じ得た年代は、寒冷適応がある程度進行し、それが収束するまでの期間をその目安とし（多少のずれを含みながらも）それに前後する一定期間であっただろう、と推定されてくるからである。また、頭骨などの考古学的発掘物を具体的証拠として、考察することも可能となってくるからである。つまり、年代の推定が可能となる、という点で重要な意味をもつ。顔面扁平化を証左とせず、単なる寒冷期間の影響というだけとした場合には、（それが最寒冷期間であった、としたとしても）、では、いつ頃に呼気量変化が生じるようになったか、ということは、気候学的気温変化時期の特定の難しさもあって、具体的年代としてはなかなか容易にはその数字を特定させにくいものと考えられるのである。（どのくらい寒冷化が進んだら呼気に影響が及ぶようになるか、という問題もあり、それは、容易に特定し難いものであらうと、現時点では思われる。）

## 7.2 寒冷適応が生じていなくとも、寒冷地と（対照的）温暖地との間で同様の相違が生じ得ること

言語的現象と上記「寒冷適応」との独立性とは別に、もう1つの重要な点を補足しておきたい。それは、既に、7.1で触れてしまっていることであるが、人類学的な身体的変化である「寒冷適応」が、頭骨に現れるようになる段階よりも前に、鼻腔を寒気による痛みから守ろうとすれば、意識的にせよ無意識的にせよ、鼻腔への吸入を減らすことは比較的容易であり、それが鼻腔口腔での呼気量比率の変化となって現れ得たであらう、という点である。

骨の変形が生じる程の極度の寒冷段階や長期間には至らなくとも、無意識的にせよ「鼻腔への呼気の流出を減らして口腔への流出を増やす」という、短時間に可能で、かつ、意識的にも出来る、より容易な動作によって、呼気量比率の変化は実現可能である。呼気量を変化させる現象は、寒冷適応以前の段階でも容易に発現し得た、ということになる。

つまり、発掘された頭骨に寒冷適応の痕跡がたとえ認めらなくとも、寒冷地においては、鼻腔への冷気の吸入を回避しようとするれば「呼気量の変化」は生じ得る。その意味でも、「寒冷適応」が呼気量変化の絶対的証拠というわけではないことにもなる。

## 7.3 今後の課題——“寒冷地の人は口をあまり開かないという類の説だ”という“ナマス吹きの論理”への反省——

アジアの言語を、日本語・中国語・朝鮮語（韓国語）という言語単位から離れ、それぞれの方言単位をも視野に入れて比較していくと、今回取り上げたように、それぞれの方言を視野に入れる必要がある問題が明瞭に浮かび上がり、新たな様々な課題が見えてくる（安部清哉（2008.4）参照）。今回の音韻対応に関わる問題についても、検討すべき課題がまだ多い

が、本論の主題を離れるので、以下には今後視野に入れておくべき観点を、簡略に記しておくことにしたい。

### 7.3.1 「では、高緯度の言語は低緯度より必ず呼気が強くなるのか？」という短絡的誤謬

「寒冷地で口腔鼻腔での呼気量が相違するなら、では、高緯度の言語（あるいは方言）は低緯度より、言語単位で、必ず呼気が強い音声特徴を持つ言語が北方に分布することになるはずではないか?!」（そのような傾向は指摘されていないからこの推論は間違いだ）と短絡的に問われそうである。

現在のところ、緯度の相違と音声的特徴との相関性は、少なくともこれまで報告されていないから、この呼気の問題は音声的分布の決定的要因かどうかは不明である（一方、先に触れたようなFRVの有標性の偏在は今後注意しておく必要がある）。

一言語内での音韻体系が大きく異なってはその言語的同一性を失う。一言語としての音声的特徴が優先され保持されるならば、あくまで“言語特徴（音韻体系）を失わない範囲での音声変化”しか許容され得ない、と考えられる。1つの言語における言語特徴のバリエーションとして複数の変数があるような場合に、何が優先され、どのような特徴が残るか、という優先順位の問題を考えるべきであろう。

それはつまり、今回の日本語、中国語、朝鮮語の方言内部において、南北差があったように、1言語内の方言的南北差という範囲で（つまり1言語としての特徴を失わない範囲で）、（類似の）音声的変異（南北差）が現れる、という方の蓋然性が高いと推定される、ということである。実際に、例えば、モンゴル語内部の南北差において、今回と同様の音声上の南北差を認めることができる。

このように、今回のような音声的特徴、および、その要因と考えられるような現象が、言語や方言等などの側面に影響して、どの部分に実際に現れるかということは、言語や地域や諸条件によって異なると考えられるので、今後、多くのデータを集積して慎重に（いずれの意味でも短絡的にならないように）、検討していく必要がある。

### 7.3.2 音声変化は口腔鼻腔流出量の変化によるのかそれ以外の要因によるか？

今回、音韻対応現象と、寒冷適応または寒冷による呼気の変化とが、関連性があると考えられることを示した。一方で、呼気以外による可能性も検討しておく必要がある。なぜなら、呼気の強化弱化と音声の変化に関する研究は必ずしもまだ十分でなく、また、それらの史的因果関係は容易に実証しにくいからである。

一方で、例えば、我々は、以下の①②のような、口腔からの呼気が増えるような発声における発声器官の変化を観察することができる。

- ① 大声を出す時の口・唇・舌・喉の構えや動き

② 咳を出す時、咳き込むような時の口・唇・舌・喉の構えや動き

これらは通常の発声とは異なるので、通常の発話運動とは一律に扱えるものではないが、その一定の類似性から、この問題を検討する材料を得ることはできる。これらには、興味深い共通性が認められる。

- ア 円唇化
- イ 唇の突出し
- ウ 口室内空洞の(円筒状での)形成
- エ 舌根部分や奥舌部分のある種の働き

呼気の強化は、これらのいずれかを機能させた発声と機能させない発音との間で、弁別的相違(有標性)を持たせた音声を発現させる、という可能性があることを推定できる。そしてそのことは、例えばアの円唇化を取り上げれば、先に挙げた「前方円唇母音FRVが有標である言語」の北方(高緯度)での偏在という現象と一致してくることを認めることができるのである。

それらとは別の可能性も検討する必要がある。次のような実験的観察を行うことも可能である。

③ 大型保冷倉庫(-30℃)の中での発声

執筆者は実験的に、遊園地等にある「アイス・ワールド」(氷点下30度を体験できる遊戯的建物)を経験してみたが、冬山や山スキーにおける氷点下10度以下等での経験を思い起こしていただくのでもよい。そこでは、やはり上記ア～エのような発声器官の変化を観察・内省することができるだけでなく、次の現象も自覚可能である。冷氣のため鼻腔での呼気に痛みを感じ、それを回避しようとするためである。

オ 鼻腔による呼吸量の減少と、それに代わって口腔による呼吸量の増大

その点では、寒冷適応で推定したと同じなのであるが、一方で、以下の3点は、呼気量の変化のために生じたのか、外気が寒いために顔面や頬・顎周りの筋肉がいわば凍えてそのような形状を形成したのか、必ずしも判然としないところがある。

- ア 円唇化
- イ 唇の突出し
- ウ 口室内空洞の(円筒状での)形成

つまり、これらは寒冷気による呼吸自体に対する影響ではなく、頬や顎周りの皮膚や筋肉への影響の結果であることをも疑っておく必要があると考える。

このように、多角的視点から様々な問題を検討していく必要があると考えている。

### 7.3.3 呼気量の増大などの変化と発音の変化との関連性の有無

拙論で提示した音韻対応の現象から、「寒冷適応」の音声に対する影響を考察し、寒冷適



応やそれ以前の寒冷化への対応だけでも、音声的变化が起こり得ることを指摘した。そこには、十分にその関連性を認めることができた。しかし、その論理的帰結とは別に、実際に過去に起こった現象としては、呼気量と発音との関係は、なお慎重に検討していく必要がある。

1つには、これまでの研究において呼気量変化と発音（音声）変化との関係は、（呼気を要因とする推論は（琉球方言などで）ままた見られるものの）実験的に実証的に示したものは必ずしも多くないからである。また、上で触れたように、呼気量の影響ではなく、寒冷のために頬、顎などが一定の形状になるための影響もなお検討しなければならないからである。

円唇、鼻音、喉音、口蓋音、奥舌音などに関わる問題と地域差の問題を、FRVのような世界的分布をも視野に入れて、多角的に検討しておく必要がある。

提示した音韻対応のうち最も明瞭なものは「k-p 対応」であり、明らかな南北差を地理的に形成している。また、同様の地理的南北差は、アジアだけでなく、実はヨーロッパのIE 語にも確認でき（安部（2006.3）で一部言及）、そこにも類似した音韻対応が見出せるからである。アジアでの言語分布とその歴史的関係は複雑であるので、その解明には、このIE 語にも認められる同様の現象との対照研究が有効であろうと考えている。

## 8 おわりに

東アジア言語における音韻対応を生み出す現象として、「呼気量変化」（口腔鼻腔流出量比率変化）とその要因としての「寒冷化」ないし「寒冷適応」を指摘した。

7章の補論に記したように、音韻対応の要因それ自体としては、なお、検討すべき課題は、多い。しかし、東アジアの北方方言で、「口腔鼻腔流出量比率変化」のために、それぞれの言語音声がこの1万年以内の間に音声変化を蒙ったであろうという本論の推定は、おそらく間違いのないだろう、と考える。しかし、その具体的音声変化となると、その実態を音価レベルまで視野にいれて解明するのは、なお多くの困難な問題があると思う。

音声のどのような範囲にどのように現れ得るかの理論的問題や音響音声学的問題もあるが、おそらく、その発現は、中国語、朝鮮語、日本語という言語ごとに、また、それぞれの言語内の方言的地域、あるいは、時期ごとに微妙に異なり、必ずしも同一ではなかった蓋然性が高い。そのような問題も十分に考慮しておく必要があると思う。

また、古い時代であることもあって、その変化の詳細になると、その時代の音声的資料の乏しい日本語、朝鮮語での考察は限界があるから、むしろ、音韻資料もその史的研究も充実している中国語音韻史における今後の研究が期待される。中国音韻における上古音から中古音への変遷では、主に北方方言をその背景にもつ長安音の問題が関わってくるが、そこにおける多くの音韻変化が、口腔鼻腔流出量比率変化という現象から解釈可能なものか、あるいは矛盾する変化があるのかどうか、中国音韻史との対照が、ある意味で、1つの検証作業に

なるのであろう。もう1つの課題である。

一方で、詳細は別稿に譲るが、印欧語 (IE) との対照研究などでは、この視点からさらに踏み込んで説明する必要がある課題が、すでに多く見えている。

これらについては、稿を改めて取り上げていきたい。

◆注1 「寒冷適応」に関しては、一例として以下の2つの文献を挙げておく (下線引用者)。

(1) 佐々木高明 (1991) 『日本史誕生 (集英社版 日本の歴史①)』 pp.266-267, 集英社

①「このような寒冷な気候の中で生き抜いた人たちは、その身体の特徴を寒冷気候に適するように作り変え、いわゆる『寒冷適応』をとげた。その結果、胴長・短足で、低い鼻、頬骨がはり出した扁平な顔、上顎骨の大きい長い顔 (高顔)、一重まぶたで特有の蒙古ヒダをもつ細い目、それにヒゲや体毛の少ない特殊な体形をもつようになったと考えられる (下段コラム参照)。このような寒冷適応によって特殊化した北方のモンゴロイドを『新モンゴロイド』とよぶが、彼らは氷期が去ったあと南下しはじめ、(略)」

②コラム欄「寒冷適応と新モンゴロイド/ヴェルム氷期の最盛期に東シベリアへ展開したモンゴロイドは、そこで異常なまでに寒冷な気候に適することになった。自然人類学の植原和郎氏によると、この寒冷適応の結果、次のような身体的な特徴が生み出されたという。①体温を効果的に蓄積し保つため、胴が太く長く、手足 (四肢) が短くなる。②凍傷などを避けるため、顔の突出部が小さくなり、扁平になる。③冷たく乾いた吸気の温度・湿度の調整のため、副鼻腔が大型化する。その結果、頬骨が横と前へ張り出す。④副鼻腔を中に入れる上顎骨が大きくなり、その結果、顔が長くなり、高顔となる。⑤目を寒気から守るため、細くなり、一重まぶたで、内眼角に蒙古ヒダを生ずる。華北の中国人やモンゴル人、ツングース人、朝鮮半島人などに寒冷適応をとげた新モンゴロイドの特徴がもつともよくあらわれているという。」

(2) 植原和郎 (1997) 『日本人の骨とルーツ』「第3章 寒冷適応」角川書店

① (寒冷適応と鼻腔) 「上顎骨は読んで字のごとく上顎——うわあご——の大部分を作り、歯を支え、咀嚼を助ける役目をもっている。しかしこの骨の役割はそれだけではない。鼻や口から吸い込んだ空気から有害な細菌やちりを取り去り、温度と湿度を調整してから肺に送り込むという重要な働きをしているのである。このために上顎骨の内側には上顎洞と呼ばれる大きな空洞があり、鼻の内部にある空洞——鼻腔——と協力して一種のエア・コンディショナーの役目を果たしている。実はこのような働きはもっぱら粘膜の役目で、骨そのものの作用ではない。しかし粘膜の表面積を増やすためには、その土台となる骨を大きくしなければならぬ。(略) したがって氷点下数十度の冷たい空気を調整するためには、きわめて高能率のエア・コンディショナーが要求されるのである。(略) 寒冷気候への適応がなくては生存が困難だっただろう。(略) 鼻の幅が狭くなったのも寒冷適応の現れだろう。それはおそらく、鼻腔や上顎洞の温度が急激に下がらないように空気の吸入量を調整するためで、寒冷気候に対する防御装置の役割を果たしていると想像される。」

② (寒冷適応の時期) 「では北東アジア人の寒冷適応はいつごろから始まったのだろうか。実はその答えはまだよくわかっていない。なぜならシベリアなどの寒冷地では、一万年以上前の旧石器時代の骨がまだほとんど発見されていないからである。(略) 一九五〇年代のことになるが (略) W・S・ラフリン教授 (人類学) は、ある論文の中で「北方アジアでの寒冷適応の開始は七〇〇〇年ほど前ではないか」という推測を述べた。」

- ◆注2 長安音の北方方言的特性については、例えば、次のような解釈が代表的なものとしてある。藤堂明保（1969）より引用しておく（下線引用者）。「唐都長安の標準語も、〈切韻〉のややこしい体系よりよほど簡素で、かつ幾分の西北訛りを残したものとなっていたようだ。」（180頁）、「唐朝は北方人の建てた国である。（略）しかも唐の都長安は、地理的には中国の西北に偏している。この地方の方言は、昔からチョット変わった癖をもっていた。」（281頁）、「この鼻音が『非鼻音化する』現象は、長安語の特色であったし、今日の山西・陝西などの西北方言の特色でもある。」
- ◆注3 モンゴロイドの顔面の変化については、冷氣に対する防衛説としての「寒冷適応」説の他、内陸寒冷地での極度の乾燥空気に対する鼻腔粘膜面積の拡大による湿度調整のための防衛説（いわば「乾燥適応」）、また、牧畜動物との共同生活もあるためインフルエンザ等のウイルス対抗上、吸気の保湿と冷氣緩和のためとする説、なども見られたが、根拠や論証が未確認情報ゆえ（ネット上の情報も含む）、紹介に留める。

◆補注：過去1万年での“日本語の歴史”のとらえ方として

\*本論では、アジアの言語の過去数万年を対象としているが、特に「日本語」に関しては、弥生時代を越えて過去1万年前までを含めてその歴史を論じる場合、「日本語の歴史」のとらえ方そのものが問題となつてこよう。なぜなら、そこには、“日本語”というのは弥生時代以降の問題である、あるいは、“日本語”の歴史は資料がある飛鳥・奈良時代以降に限定される、というとらえ方もあるからである。本稿執筆者の「日本語の歴史」の考え方を、念のため、補記として記載しておくこととしたい。

(1)【その意味と考え方】

「日本語の歴史」には、日本語とは何か、日本語をどうとらえるか、という日本語自体の定義の問題と、言語の「歴史」というものをどのように考えるかという方法論上・理論上の問題と、それらを含む「史観」上の問題とがある。そこには、日本語の系統や起源の問題も含まれる（日本語が、比較言語学の系統論的意味でどのような系統に属するかについては、諸説あるが世界的研究水準でも現在定説と言えるものはない）。

例えば、「日本国」の領域内における「日本語」と呼ばれてきた1言語の歴史ということになれば、この列島内全体のその方言差も含めての歴史が問題となる。一方、日本という国家としての言語の変遷ということになれば、いわゆる「国語」として、文化的中央での規範的日本語の変遷を中心に考える、という考え方もできる。狭くは、「日本」という名称が生じて以降の言語ということであるなら7世紀半ば以後の「『日本』語」に限定して考えることもできる。限定的な一例を挙げただけでもこのように異なっている。

一方、言語学の基本的な考え方として、過去の言語は、年代のわかる文献資料によってその存在が確実なものとして実証されると考えるならば、その立場に立てば、文献によって文法・語彙・音韻等の言語体系総体がある程度把握可能な歴史上限をもって、その言語の上限と見ることになる。日本語の歴史は、その意味では、ある程度の文献が現われる飛鳥時代など7世紀代以降、あるいは、『古事記』『日本書紀』『万葉集』がそろそろ奈良時代から始まる（確認できる）ということになる。

奈良時代以前の古墳時代、弥生時代、縄文時代にもこの列島では、何らかの言語が話されていたはずであるが、その段階になると、それらが果たして「日本語」と呼べる性質のものであったかどうか、また、それをどのようにして認定し、証明していくか、という問題が出てくる

ことになる。

文献のない時代の言語の歴史的研究も世界的に行われている。しかし、それらは、近隣言語との比較言語学的比較対照を伴い、また、言語の分岐時代を文献年代より遡って推定するという方法や、言語地理学や言語類型論による歴史的研究によるにせよ、一定の理論や仮設の方法に基づく推定を含んだものとなり、文献資料による実証的歴史とは異なった言語史の考え方・とらえ方によることとなる。

日本では、大和朝廷時代の日本語資料はなく、邪馬台国の位置は現在でも畿内説・九州説との決着を見ない。また、奈良や京都と九州とでの言葉が同じ特徴を持っていたか、など方言の問題も考慮しなければならない。日本語の成立を弥生時代以降のものに限定的にとらえる説すらある（大野晋氏の説）。考古学の資料によれば、弥生文化が拡大していく周囲には縄文文化が色濃く残っていた地域があり、そのような古い段階の新旧の地域差を投影する言葉自体の新旧差は、残存する方言の地域差にもうかがえる。それゆえ、縄文時代を無視するなら、それらの地域差の説明がまた別に必要となる。縄文時代やそのような方言差の問題を看過すれば、畿内にもあった古い段階の「日本語」も切り捨てて考えるということをも意味しよう。奈良時代の『万葉集』の東歌・防人歌からは、糸魚川・静岡方言境界線での東西方言の相違の存在と、東日本方言を西日本とは別の方言として区別する方言意識とを確認できるが、その相違の起源や要因も未解決である。

西日本方言を基盤とする古代の文献資料の日本語のみをもって古代日本語の全貌であるとするのは、ある種の偏りを認めて一定の視点から行う解釈となろう。そのような地域差（方言）の問題は、近世語を見ればより明白となる。一般に近世では、前半が上方語（関西方言）、後期は江戸語（関東方言）を中心に近世語の歴史として説明されることが多い。しかし、上方語から江戸語への規範語の推移は、実態としては上方と江戸との地域語の相違を無視しては位置づけが困難である。近代日本語は、その江戸語を受け継いだ東京語を基盤として成り立ち、上方（西日本方言）とは異なる特徴を多く持ったまま現代共通語へとつながっているのは周知の通りである。一方で、上方語は近世後期でも関東の江戸語とは別に変遷し、その江戸語は、近世前期以前から上方語とは別に変化して後期の江戸語へとなっていて、それぞれがやはり歴史を持っている。前期上方語から後期江戸語そして東京語へとつなぐ（一般的）「日本語の歴史」の把握は、明かに「規範語の推移」という「史観」を、すでに負っているのである。

文化的中央での「規範語の推移が日本語の歴史」ならば、それが不明である奈良時代以前へは当然遡及不可能ということになる。また、上記のような「中央規範語史観」に立つ解釈に対して、例えば、「江戸後期の上方語はもはや『日本語の歴史』ではありません」として、地域毎の変遷を日本語史から捨象してしまった時、奇異な違和感をわれわれは受けるであろう。それは、1つの確かな解釈ではあるものの、一面的見方でしかないことを、確認することができる。

《規範語と地域差・位相差》ところで、そのような規範となる日本語は、文化的中央における支配階層の、主に書記言語を基盤とした日本語とすることができる。そのような文字に残された言語は、歴史的書承性が高い故に、次の時代の規範としてさらに受け継がれやすい。文字を操れた知識階層でもあった支配階層の文字に書き残された言語こそが、次の時代への規範としても受け継がれやすくまた残りやすかったのであるから、やはり、日本語の歴史というのは、そのような文化的中央において主に文献資料に残されてきた言語を元として把握され、構成されるべきものである、という考え方も、ある面での真理である。要するに、生き残り伝えられてきたものが形作ってきた軌跡こそが歴史であるという史観である。

その一方で、たまたま残されてきた文献資料で日本語の歴史をたどらざるを得ないという問題がある。文献を残し得た階層は歴史的に一律ではなく、当然言葉にも位相的相違があって、貴族階層から武士階層、やがて江戸町人・庶民が加わり、一般市民全体へと変化してきており、決して言語の担い手は一樣ではなかった。また、漢文・和文などの文体差も大きい。それらの担い手とその文献自体にも地域が投影されるから、文献の日本語自体も、実は「奈良方言」「京都方言」、また、（鎌倉・）上方方言・江戸方言・東京の方言であるという問題も含まれている。『源氏物語』は京都の貴族の一方言ではないかと敢えて問うてみれば、この本質が理解しやすかろう。鎌倉時代における関東方言の京都への影響のように、中央と地方との時代ごとの人の交流は中央語の変化を促し、地方語が中央語のへ影響することも少なくなかった。中央語と地方語、書記言語と口頭言語（方言）、支配階層と被支配階層の言語、などの間における言葉のせめぎ合いという動的構造もまた、この日本語の歴史の側面である。そのように考えてくると、日本語（あるいは国語）としてその時代時代の人が規範（代表）であると考えよう。中央語の、主に書き言葉（書記言語）の歴史を中心としながら、中央への影響が大きかった周辺方言やそれと相互に影響しあつたであろう東西日本の他の方言の変遷も広く視野に入れて、文体差・位相差も含めて総合的に日本語を考えていくのが「日本語の歴史」としてふさわしいということになる。要するに、「日本語の歴史」を考える場合には、多様な地域差の問題、文化的中央の地域的変遷、支配階層の変遷、残された資料の文体的・位相的変遷などの、多重で多様な変遷を総合的に把握した解釈が求められることになる。

## (2)【日本語の成り立ち：概観】

上述のように、少なくとも縄文時代の範囲まで推定される日本語の事情を考慮すると、日本語の歴史の仮説的モデルとしては、千野栄一氏・松本克己氏が共通して提示している次のような仮説は蓋然性が低くないことがわかる。

「多くの言語学者が、いちばんあり得るケースだと考えているのは」「一部の集団が非常に有力になり、やがて「大和朝廷の成立によって」「周辺の言語をだんだん吸収する（略）というような形で」「現在の日本語の前身に統一され」、そのような「原日本語」（第一次中央語＝安部）が、さらに変化しつつやがて周辺方言にも及び、「今の日本列島の非常に統一的な言語状況というものが生じたのではないか」という仮説である。」（千野・松本両氏の表現を統合）（安部（2000）参照）

これらを踏まえれば、現段階で有力視される「日本語の成り立ち」の解釈は——列島内に及んだオーストロネシア語的言語（特に音声及び語彙）、及び、アルタイ語的言語（特に統語法と語彙）双方の影響を引き継ぎつつ、特におそらく弥生時代以降の、文化的に均質化に向かう過程の歴史的段階において、「原日本語」とでも呼べるようなある種のゆるい均質化を伴った言語形成のプロセスを、畿内地方を中心に経過しながら、一方その途中で、渡来文化と共に中国語や朝鮮語ほかの近隣言語を、外来的要素として幾度かに渡り濃淡を伴いつつも受容し、そして、上代資料にやっとその総体を把握できるようになる「上代日本語」という姿に向かって、徐々に整ってきた言語である、ということになるか。要するに、日本語は、南方系と北方系の言語の何かしらかの重層と混交を背景に、中央の有力な支配的集団と、その影響の及んだ文化的に優位な東西地域の中で、次第に均質化されてできた言語である蓋然性が高い、と考えられる。

## (3)【地理言語学的類型論的背景】

日本語のアジアにおける地理的位置付けとしては、現在の類型論的研究からは「アジア・環

太平洋」の言語との類似が指摘され(松本克己)、またそれは、類別詞ほかの言語特徴と文化人類学的現象の地理的分布範囲との一致から指摘される「モンスーン・アジア」という領域(安部)とも共通する。しかも、それらは従来の系統論研究での候補言語全体をも包含するという一致を示す。近年の研究では、日本語の歴史は、それら「アジア・環太平洋」「モンスーン・アジア」内の言語史に包含され得る列島言語史として、把握されつつある。

(4)【日本語の上代以前】

《最古の日本語》文献上最も古い日本語の痕跡は3世紀の『魏志倭人伝』における50数単語の記録である。

《上代以前の日本語の特徴》比較的定説化している点を挙げておけば、母音はアイウオの4母音、ハ行子音はp、特に格助詞は未発達で限定され(多くは名詞的な形態素からの派生—例、「へ(辺から)」)、形容詞の起源は名詞の状態性形態素でその活用は未発達であり(名詞・動詞より発達が後で、動詞起源でなく名詞起源)、語彙は1音節語か2音節語からなり、接頭辞と接尾辞を持ち(接中辞の痕跡はある:ヨシーヨ□シ、他)、少ない語(形態素)から多くの基礎語を派生させた(子音を中心に多くの形態を派生させ名詞・動詞・形容詞・助動詞などを作る派生法が盛んであった。例えば、名na、音ne、鳴るnari、泣く・鳴くnaku、告るnoru)。

(5)【課題】

日本語の歴史について注意すべきことの1つは、残されている主な文献資料が地域的位相的に偏っている点である。8世紀まで大和、9世紀から16世紀まで京都、17世紀から19世紀半ば過ぎまでの前半は主に上方地方で後半は江戸地方が、記録された言語の背景になっている。日本語には相互に相当に異なった方言があり、各時代の資料もその地域語の影響を受けているが、それぞれの方言の歴史については今後の研究課題である部分がなお大きい。日本語の諸方言それぞれの歴史の変遷過程と相互の影響関係、及び、それらと文化的中央の日本語の形成過程との関係が明らかにされてはじめて、日本語全体の歴史が解明されることになろう。

【本補注の関連拙論——○安部清哉(2000)「日本語史研究の一視点——方言国語史の視点から——」『国語論究8 国語史の新視点』明治書院、○安部清哉(2004)「日本語はいったいつ頃から使われているの?」「日本語と朝鮮語は兄弟なの?」「『縄文語』『弥生語』は日本語なの?」『日本語あれこれ辞典』(おうふう社)——本項は、当初とある事典のために準備したものであったが未公表となったのでここに寄せることとした。】

【参考文献】

- (北方モンゴロイドと「寒冷適応」に関する指摘は、佐々木高明、埴原和郎のものを掲載した。)
- ABE, Seiya, 2006, On the “Monsoon Asia Substratum” and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics, pp. 79-96, Guido Oebel edit., *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache*, Studia Iaponica Wolfgang Viereck emerito oblate, (The Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck), pp.372, LINCOM GmbH, Muenchen, Deutschland.
- 安部清哉(1999.9)「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35, フェリス女学院大学国文学会
- あべせいや(2004.12)「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15, pp.42-54, 明治書院
- 安部清哉(2005.5)「日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジアという世界——水源地形名 numa <\*nub (沼・泥)の「m—b」音韻対応——」『日語日文学』26, pp.1-19, 大韓日語日文学会

- 安部清哉（2006.3）「アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”（摂氏0度線）——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部研究年報』52, pp. 39-90.
- 安部清哉（2006.3b）「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究（共同研究プロジェクト概要）」、学習院大学人文科学研究所『学習院大学人文科学研究所報 2005年度版』pp. 39-43.
- 安部清哉（2007.3a）『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究』（平成15-17年度科研費（基盤研究（C）成果報告書））私家版
- 安部清哉（2007.3d）「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究（共同研究プロジェクト概要）」、学習院大学人文科学研究所『学習院大学人文科学研究所報 2006年度版』pp. 27-36.
- 安部清哉（2007.10）「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」（k-x-p）」『国際化視野中的日本学研究——紀念胡振平教授從教45周年（東亜日本学国際検討会論文集）』（洛陽・東アジア日本学国際シンポジウムの論文集）pp. 31-39, 天津・南開大学出版社
- 安部清哉（2008.4）「アジアの中の日本語方言」小林隆編『方言の形成（シリーズ方言学第1巻）』岩波書店
- 安部清哉（2009.3）『『きつ（にはめなで）』（『伊勢物語』十四段）の日本語方言及びアジア言語の中の位置』『国文学言語と文芸』125, pp. 37-58, おうふう社
- 佐々木高明（1991）『日本史誕生（集英社版 日本の歴史①）』pp. 266-267, 集英社
- 藤堂明保（1969）『漢語と日本語』秀英出版
- 埴原和郎（1997）『日本人の骨とルーツ』「第3章 寒冷適応」角川書店

#### 【付記1】

本論文の投稿後に、長嶋善郎先生のご逝去のことを知った。長嶋先生には、本テーマの準備過程における「呼気量」の測定に関する研究プロジェクト（PJ）（参考文献の安部（2006.3b）・（2007.3d）の報告参照）を進めるに当たり、先生の篤いご理解とご助言をいただいていた。この時の「呼気量」研究に関わる研究成果としては、その延長線上に視野に入れていた言語現象の1つであるところのこの本論が、公表するものとしては最初のものになる（PJ報告である安部（2006）・（2007）は短文の内容紹介である）。PJの頃はあまりに突飛な発想で恥ずかしく思い、拙文の解釈をお伝えしないうでしまったが、長嶋先生ならば、拙文をどのようにお読み下さるだろうか。お目にかけることがかなわなくなってしまったことが悔やまれてならない。

お詫び申し上げます。拙論を、謹んで長嶋善郎先生のご霊前に捧げさせていただきます。

#### 【付記2】

本稿は、次の研究費による研究成果の一部である。

○学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト（2005年度・2006年度）

「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究」（代表：安部清哉）

上記の研究プロジェクトメンバーとして、上野善道、大山玄、佐藤亮一、長嶋善郎の各先生にご理解とご助言を戴いた。改めて深謝申し上げます。

#### 【付記3】

本稿の一部（6章までの要点）は、以下の題名で口頭発表を行っている。ご質問下さった方々に感謝申し上げます。安部清哉「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の北方方言に生じた「呼気量変化」による南北方言間の音韻対応について」（第176回青葉ことばの会、2011年11月19

#### ENGLISH SUMMARY

### **On the Change of the Ratio of Expiratory Volume from the Oral and Nasal Cavities, Caused by “Cold Acclimation”, As a Factor of Phonological Sound Correspondence in North-South Differences between East Asian Dialects.**

**ABE Seiya**

This paper shows that “the change of ratio of expiratory volume in the oral and nasal” is a factor of Phonological Sound Correspondence in North-South Differences between East Asian Dialects.

It can presume that the change of the Ratio of Expiratory Volume in the Oral and Nasal, that have arose in East Asian Dialects in about 10,000 years before B.C., from a viewpoint of Phonological Sound Correspondence in North-South Differences. We found out that “the cold acclimation” was a factor in the change of the ratio. Since “cold acclimation”, decreased expiration passing through the nasal cavity, and increased expiration passing through the mouth on one side, the pronunciation changed in Northern dialects. This change in pronunciation produced the Phonological Sound Correspondence between North and South dialects in East Asian.

*Key Words:* cold acclimation, The ratio of expiratory volume in the oral and nasal, North-South differences in East Asian Dialects, A Factor of Phonological Sound Correspondence in East Asia, Mongoloid,